わだち 轍

Vol 20

発　行：社会福祉法人 高知県知的障害者育成会　〒780-0028 高知県南国市陣山字弥市 531-1　TEL088-855-3717　FAX088-855-6181
発行責任者：秋友英稔（社会福祉法人 高知県知的障害者育成会）　編集責任者：濵田明（社会福祉法人 高知県知的障害者育成会）
印　刷：川北印刷株式会社

轍【わだち】

車が通ったあとに残る輪の跡という意味から、「先人たちが築いてきたものを大切にしながら、未来へとつないでいく」という思いを込めてつけました。

カテゴリーの見方

- Topics ／ 最新の出来事
- People ／ 障害者の暮らしぶりを紹介
- Work ／ 福祉で頑張る人たち
- Art ／ 障害者の光る感性
- Message ／ 支援者からのメッセージ
- Report ／ 取り組み報告

撮影者：UniMocchan（うにもっちゃん）

Report

第20回高知県知的障害者育成会職員研修会報告

本年度の研修は、令和４年10月１日、「人とのつながりと、心の豊かさを見つめ直そう」をテーマに、ＺＯＯＭにて開催しました。

はじめに、地域活動支援センター南国・永田歩相談支援専門員から「幸せな人生の土台作り～経験を豊にするためのお手伝い～」と題し、早期療育での思いの実現に向けた多職種連携による支援事例の発表がありました。

乳幼児健診で言葉の遅れが分かったＡくん。相談支援が開始され、１年が経過しました。この間、キーパーソンの母親には、障がい受容への葛藤や成長過程での疑問、不安が様々にあり、相談支援専門員としてこの気持ちに寄り添い、傾聴し、共に考える事を大切にしたとの事です。同時に、Ａくんが主体であることを常に認識して多職種と連携し、同じ目標に向えるよう丁寧に情報交換・共有、マネジメントを行ったとの事でした。

発表者　永田相談支援専門員

また専門的サービスの提供により、１つ１つの思いは実現へと向かい、Ａくんに出来る事が増えてきています。母親は、Ａくんの日々の成長に気づく事ができ、喜びが増え、近い将来への具体的なイメージを持つ事ができました。

現在は、それを支援計画にし、１年後の小学校入学を見据えた具体的な支援を実施しています。

発表の中で「利用者が沢山の人とつながり、経験を積む事で成長に作用し、心豊かに育つきっかけになるお手伝いができれば」と話していました。

相談をすることで楽になる・幸せになる
経験をしていただけますように

この先の人生の中で「人」を信頼し頼る
経験をしていただけますように

人生の土台作りの一翼を担えていますように

そして自分の存在を「利用者の思いの実現」への最大の資源・媒体だとして、専門職としての自己研鑽と心豊かな人間性の探究を大事に日々奮闘しているとの事でした。

心豊かにその人らしい人生が送れるよう一人ひとりと丁寧に関わる事で、Ａくんやご家族自身が笑顔になり、私たち支援者や仲間、地域へと笑顔がつながる事を想像し、心が動かされました。

パワーズ山田　尾立　有里子

講演では、社会福祉法人　佛子園　理事長　雄谷良成氏より「ごちゃまぜ～地域を拓く共生社会～」と題して、施設の実践をお話しして頂き、これからの私たちの仕事の指針を学ぶ機会となりました。地域の中に誰もが集える居心地の良い場所があり、自分の居場所があると実感出来る事。人を尊び、人を想い、人と人とがつながり寄り合う。地域として物事を考えていく事が大切である、というお話がありました。

佛子園の紹介動画では、障がいのある人もない人も、高齢者も皆が一緒に運動や入浴・食事・お酒を楽しみ、子ども達は中庭の遊具で遊ぶ等、笑顔で自由に過ごしていました。

日々問題は起きるが、問題が起きる事を楽しみ、問題が起きる事を前提に、話し合う事で人と人とがつながる。覚悟と寛容さがポイントだという事でした。また、建物そのものが、人と人とがさりげなく出会う場所となるように設計されているそうです。

佛子園では、１９８８年から街おこしに取り組み、能登の高齢過疎地でビール醸造事業化を行い、働く場と現地雇用を創出しました。また、廃寺だった西圓寺を再興し、地域コミュニティセンターにした事で、少数特定の小さな町から人のつながりが徐々に広がり、人の関りが密になり、１０年間で世帯数と人口が増加したという事でした。

令和元年には、「生涯活躍のまち」（ごちゃまぜ）の閣議決定文書等での位置付けがされています。青年海外協力協会とジョイント・ベンチャーし、日本各地で様々な「地方創生事業」にも取り組まれています。

私の心に残ったのは、重症心身障がいの方と認知症の方との出会いがあり、関りが深まる中で、重症心身障がいの方の首の可動域が広がり、認知症の方の徘徊が減ったというお話でした。医療や福祉に加え、人と人とのつながりが、人に希望や大きな力を与えるのだと、強く感じました。

講演を拝聴させて頂き、利用者も私も、地域の一員である事を再確認し、まず住んでいる地域・勤務先の地域の現状をしっかり把握し、つながる事から始めたいと思いました。そして、利用者が望む暮らしの実現のために、利用者と一緒に人と人とが笑顔でつながり、心の豊かさが感じられる、優しさに包まれた居場所作りをしていきたいと思います。

パワーズ山田　大塚　明世

Topics

くろしおイベントDAY！ 愉快な仲間と楽しい時間やき～！

「ねえねえ！今年はくろしお祭りあるがー？」

目をキラキラさせる利用者達。皆さんにとって、とても楽しみにしていた“ふれあいくろしお祭り”ですが、残念ながら新型コロナウイルスの影響により今年度も開催とはなりませんでした。その代替案として、山南コミュティーセンターを会場とし、岩城氏を講師にお招きしてのミュージックケアとカフェイベントを11月15日に行いました。

当日、皆さんの表情はとても穏やかで、ゆったりとした時間が流れていました。特に印象に残った出来事がありました。ミュージックケアの終盤、布製バルーンの端を利用者全員で持ち、岩城氏の掛け声によってバルーンが宙を舞った際、普段は余暇活動に参加されない利用者が真っ先に駆け寄ってきて、その下へスルスル潜り込んだり上に乗って飛び跳ねる様子がみられたのです。その利用者は満面の笑みを浮かべて、「幸せだな。」と言っている様にも感じられました。また、珍しい楽器に興味を示し演奏したりする利用者も居て、その光景を見てとても嬉しく思うと共に、新たな一面を知る機会となり、そこに居た全員が温かい気持ちに包まれました。

カフェタイムも皆さんとても喜ばれ、大成功のイベントとなりました。利用者・職員が一丸となる時間。コロナ渦でも楽しむ事の出来る生活の大切さを改めて感じる事が出来たように思います。

楽器演奏中

香南くろしお園　山崎　多喜

Topics

「ぶしゅかん採りようでー」

８月下旬から９月にかけて、ぶしゅかんの収穫が行なわれました。２年目となり収穫に向けた栽培の要領を覚えたため、作業は収穫時期まで順調に進みました。

年間を通じて、かんきつかいよう病（細菌による感染病）予防のため、発病して枯れた葉や枝を切除するという大事な作業があります。年々木が伸びることは喜ばしいのですが、作業量も増えていきます。かんきつかいよう病の感染が深刻な幼木の時期にこの作業を地道に行い、見事に難局を乗り切ることができました。作業は非常に大変でしたが、利用者の方々の頑張りがあったから木が大きくなったのだと、いつも感謝の気持ちを伝えています。

また、有機栽培のため害虫防除も手間がかかります。他にも天候に大きく左右されたり、肥料の追加など力仕事や地道な作業があります。しかしながら、屋外で開放的な雰囲気なので、いつも冗談を言い合いながら和気あいあいと作業しています。

利用者支援の面では、障害種別の多様化にともない、他の利用者と共同での作業が苦手な方の利用が増えたのですが、作業場が広く環境設定がしやすいため、落ち着いて作業に従事できています。また、一定の作業のエリアを任せることで、責任感や達成感が得られ、やりがいに繋がっています。

初収穫の昨年は、約１．５トンでしたが、今年は１トンに満たない収穫量でした。もともと増減は予想されていますが、四万十ぶしゅかん生産者組合や高知県幡多農業振興センターにご指導いただき、毎年安定した収穫量が確保できるような栽培方法を学んでいきます。手間を惜しまず、手塩をかけて育てていきたいと思います。

今年、四万十ぶしゅかん生産組合が企画し、アオで収穫したぶしゅかんを使った「四万十ぶしゅかんアイスキャンディー」が、久保田食品株式会社より新たに発売されました。四万十市のスーパーマーケットやドラッグストア、高知県西部地域の道の駅で販売しています。好評なので第２弾を構想中です。見かけた際は是非ご賞味ください。

多機能事業所「アオ」　伊賀原　雅文

「くろしおガーデン」共同作品
香南くろしお園

「よさこい」安岡　優子

「私の心」
澤井　菊美

「ももこさんとわたし」
依光　椋子

「ハルウララの春探しの旅で
出会った春の仲間たち」
島﨑　千尋

育成会 美術館

Art

Sprit Art

スピリットアート展 入選作品

「トンボの国」
宮川　浩二

「幻の鯉」
前川　一郎

「ちゃことぼく」
和田　義正

「おこっちゅう」
井浦　美琴

「年輪～時を刻む～」
地域活動支援センター南国

「ぼくのたからもの」
李栩

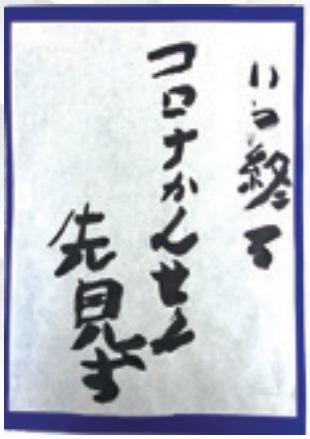
「ふわふわする用クッション」
のんびり猫

「気分のままに思いをつづる」
ゆずりは

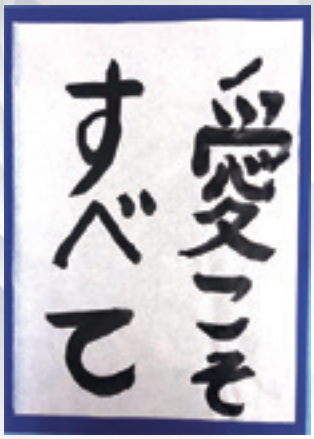
「梅雨を彩る花達」
森本　綾香

「貯金箱」
翼

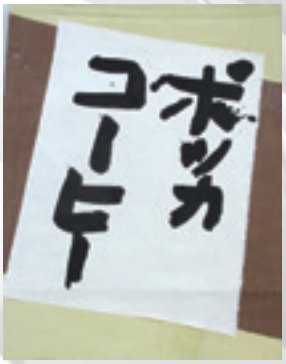
「星組」野島　あずさ



「いつ終わる」加用　喜英



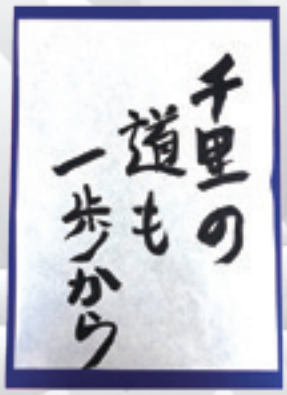
「愛こそすべて」長谷　直哉



「ポッカコーヒー」
中島　麻里

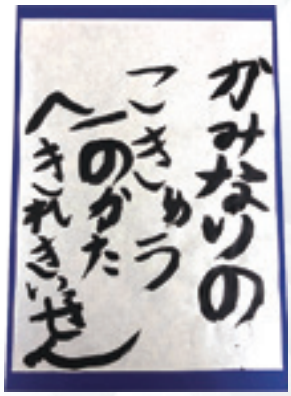
「まさこの「ま」」石丸　雅子

「はなび」西川　睦紘



「千里の道も一歩から」
宮川　浩一

「まる」中村　明日輝



「善逸の技」中平　光明

ご意見・ご感想

機関紙「わだち 轍」に関するご意見・ご感想などございましたら、下記連絡先までお寄せください。いただいた貴重なご意見を今後の機関紙づくりの参考とさせていただきたいと思います。

社会福祉法人
高知県知的障害者育成会
TEL　088-855-3717
FAX　088-855-6181
Mail：kochi-ikuseikai
@iaa.itkeeper.ne.jp

People

記録でつなぐ、未来へ

UniMocchan
（うにもっちゃん）

今年４１歳のＡさんは平成２３年からグループホームを利用され、現在は病院の厨房で働いています。

仕事の傍ら休日を利用し、フィルム式一眼レフカメラで、高知市中央部を中心に日常のたたずまいにスポットをあて撮影されています。撮りためた写真は「中高知フィルム散歩」と題して、半年に一度、１冊のフォトブックと１枚の CD-ROM で資料化しています。

それを UniMocchan（うにもっちゃん）のカメラマンネームで、高知市のオーテピア図書館に寄贈しています。この記録活動を通して社会参加されています。

写真を撮りためるきっかけとなった出来事が、平成２８年に発生した熊本地震でした。被害を受けた熊本城を見て、居ても立っても居られなくなり手持ちのカメラで高知城を撮ったのがきっかけです。当たり前だった日常を一瞬で奪った地震、日常を当たり前だと思ってはいけない。何気ない日常のありがたさ大切さを強く感じ、写真を撮って記録に遺そうと思ったようです。

デジカメが主流の今日、フィルム式カメラにこだわる理由は、中学生の時のつらい体験が遠因になっています。ある時、同級生に無理やり本意ではない写真を撮られました。いじめでした。写真を撮った同級生がフィルムを持ち込んだ写真店の店主が、不自然な画像を見ていじめが発覚しました。このような体験からフィルムに救われたという思いになり、救ってくれたフィルムに恩返ししています。

写真に記録して次の世代に遺しておきたいとの思いではじめた活動は、今年で５年目になります。何気ない日常を普通と思わない。人の役に立ちたいという思いで今日も写真を撮り続けています。

ライフサポート「大津」小森　竜宏